

モナドは単一な窓である

居間の大机に跳上って遊んでいたことも、勢い余って床に顔落した。大人たちが叫び声をあげて駆けよると当人は怪我ひとつせず、机から3歩ほどのところに坐って無心に笑っていた——三十年戦争で荒廃しきったドイツで、最善なる神を終始たえ、数学、記号学、言語学、物理学、機械学、化学、錬金術、生理学、天文学、地理学、古銭学、系譜学、法学……己が探った才知の限りをつくして神の原理の自覚的再現「普遍学」の樹立に精魂をかたむけたウィルヘルムの幼年時代の姿であった。

種々の記号とその表象の照応関係についての洞察がライブニッツにとっての出発点であった。すでに8才のとき、彼はリウヴィウスのラテン文を挿絵と本文との対応づけにより、暗号を解読するように読みこなしていたという。記号の表象への欲求を発現させることが己の表象の一契機となる——そこに神の深

慮、普遍的秩序の聖なる支配を感受することは、少年ウィルヘルムにとってたやすいことではなかった。われわれの思考自体を考察の対象とすれば、単純概念を「人間思想のアルファベット」として揃えておけば、あとは普遍的秩序の映し、結合法のヴァリエーションによってあらゆる思想は自動的に導出できる。アリストテレスの10のカテゴリ一論からヒントを得て、最初にこの発想に到ったのは、ライブニッツ14才のときであったという。「普遍学」の中枢、「普遍的記号法」は彼の思索活動の中枢ともなった。

ライブニッツは急速に数学に接近する。パリでデカルトらの新数学の風を受けるまでのライブニッツは、真正ピタゴラス学徒であった。

17才の処女作「個体論」では「事象の本質は数のごときものである」と綴り、20才の「結合論」では単純概念を表象する記号として整数をあて、四則演算により複合概念や命題を導いて論理計算に先鞭をつけた。

だが17世紀、すでにデカルトにより幾何学と代数学の統一が果たされた時代に生を受けたライブニッツにとって、無限との対決は不可避の命題であった。デカルトの解析幾何学の手法は、ライブニッツの「記号」観念を無限小へと一気に追いやった。

ライブニッツは無限小となった記号がおも表象力をもち運動することを目のあたりに観た。

夢中でその運動学を書きとめたとき、微積分学が生まれ落ちていた。このときの「函数」概念の発見は、彼の思考の自在度を一挙に拡大した。

乗・徐・開平のできる計算器は、その機械的定着であった。1676年ハーグ。4年にわたるパリ生活を終え、30に達していたライブニッツは、死期も迫ったスピノザと「エティカ」の草稿をはさんで会見していた。永遠の静寂にあずかるスピノザの幾何学的倫理学は、ライブニッツの視線の下で微係数がかけられ、唯一なる実体=神も、無数のモナドへと尖光しはじめていた。もはや世界はデカルトのいうように閉じた微粒子とその延長から成るのではなく、極小場にひかえる実体から放たれる表象の集積体となるべきであった。点は空間の中に位置を占めるのではなく、点が位置を表出し、空間を創りだすのでなければならなかった。トボロジ-の先駆「位置解析」の発想は33才のときであった。アインシュタインを待たずとも、時間もまた表象の序列として途中から派生することになった。

「モナドロジー」の完成は68才、死の2年前であった。普遍的アカデミーの建設は思うにまかせず、普遍的教会の実現の可能性も皆無であった。しかも不死なるモナド、記憶が付着すれば魂となり、さらに理性を持てば精神ともなるモナドはそれぞれの極小場で全宇宙を表出し、「最善の原理」に従って不断に表象を重ねあっているのであった。

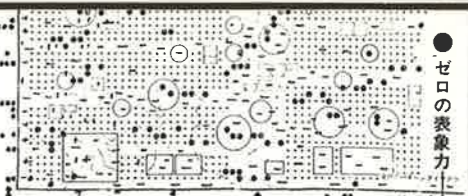
十川治江

ライブニッツの自己診断書によると、彼は背丈は中位、細く、顔色は蒼白で手は乾いて冷たかった。健脚で精気の循環も激しすぎるくらいだが視力は弱く、記憶力も強くはなかったという。

ニッツに突き刺さっていたからこそ彼は「神の名」において真理を要求したのであって、同じ内容を「神の名」を使わずとも叙述しえたはずである。先の引用、あるいは「神は魂の太陽であり光である。」(形而上学叙説)の「神」を「モナド」に置き替えてみよ。むしろ、世界調和論として知られる「神との調和が約束されている神国の幻想」すらも、神のためだけではなく涅槃のためであり、神を語ることも魂を語ることもそれが原理的開展につながっているかぎり、神がモナド的世界の代名詞であつても一向にさしつかえないことに気がつくであろう。

しかし、この「ライブニッツの表現に従わないライブニッツ魂理学」には無理がある。たとえば、以上の推理は「モナドは神の身から不断に放射されている閃光によって生み出される」という説明とは真向から対立してしまう。そこで次のような修正を試みてみる必要がある。「神(魂)——論理」
「モナド」。さらに、「神が与えられれば(魂)——論理」モナド、が成り立つ。このふたつの奇妙なテーゼの意味を平らに言うとき、世界は存在の構成要素であるモナドによって「魂」と呼ばれる「魂」を不断に形成しているが、実際には、世界は粒子的なモナドの放射的影響を必要としているのであり、その放射力を「神」と呼んでいられる。ほぼこのようなことになる。もつと簡明に言うなら、世界の本質は「魂」——「論理」にのみあつて、その本質の放射性格を神と呼び粒子的構造的性格をモナドと呼んでいる。これでよい。ライブニッツにとって重要なのは、神でもなくモナドでもなく、「魂」——「論理」というこの絶対抽象、普遍性、調和そのものなのである。では、神はこの時代の習慣によって主語とされているとしても、わざわざモナドを持ち出したのはなぜか。答えは簡単だ、彼は叙述しなればならなかったからである！

さらに強引に推理してみよう。ライブニッツの使う「神は」という主語は、彼の思想全貌の主語、象徴的には彼の書物自身の主語なのではなからうか。逆の言い方をすれば、ライブニッツは魂理学そのものを述語としたかった、また、そのような魂理学を発するみずから存在を述語化したかったのではなからうか。仏教的魂理学の経典「法華経」は「如是我聞」に始まっている。この配慮こそ文字通り意味深長であり、ついに今日に至る論理学が文法学的極致に取り組んでもなお気がつきえなかつたところの「主語」述語による命題記述の自己矛盾」を突破するヒントであった。おそらく、ライブニッツはこれを直観していたのであろう。「如是我聞」こそ使っていないが、次々に文中の主語を変換することにより、思考全体的主語「神は」を叙述の外側に出してしまつたのである。それかあらぬか、「単子論」七七に次の言葉が挿入されている。「魂は滅びることのない宇宙の鏡である」。また、八六に「宇宙というからくりの建築者としての神と、精神の住む神国の君主としての神との間に、もう一つ別の調和があることを認めないではいられない」。諸兄はこの二行をどのように読まれるであろうか。



ライブニッツの「自然は跳躍しない」という確信の前には0と1の断層は消えうせる。ゼロという「表象力」の発見の数学的表現が微積分学であり位置解析ともなった。

「私は物質のうちにいるところ付加されている能動的原理を認めるから、物質を貫いていたるところに生命の原理すなわち表象の原理がひろがっていると考えます。これはモナドであり、いわば形而上学的アトムであつて、部分をもたず、自然的には生じたり滅びたりすることのないものです」

これはライブニッツが彼のかつての秘書であつた数学者クリスチャン・ワグナーの「魂とは何か」という質問に答えて送つた手紙の一節、短いながらもライブニッツの思想がよく析出している。もつとも、「ライブニッツの思想」と一口に言うもの、それをどのような基軸とどのようなターミノロジーで説明しようのか、ライブニッツ研究者ですらいつも頭を悩ませてきたらしい。本家本元のドイツで一九二三年以来刊行されつづけている全集が未だ三分の一に達していないのだから、こんな化物じみた思想家の座標を簡単に決めつけようとするのがどだい無理なのであろう。下村寅太郎博士の語では「完全な全集が出揃うのに百年はかりますよ」ということであつた。総本山がこんな按配なのだから仕方あるまいが、工作舎で十川治江が刊行を予定している選集企画を準備中の永井博士の「ライブニッツ研究」が出版されて二〇年、その間、見るべき研究書は三冊を数えられるかどうかというわが周辺の有様である。だからといってこのような事情をもってライブニッツの巨大な業績を無下に容認するにもゆかず、つまりはライブニッツがいった何を果そうとしたのか、いまのところ誰も証明できる者はいないと言つた方がよいくらいなのだ。

魂理学者ライブニッツの記述法

たとえば、自然学史を通過した者なら、ライブニッツの空間論と時間論、例の「空間は共存の序列であり、時間は継起の秩序である」をいつも近代時空間論の出発点に描いているにちがいないのだが、堂々たる空間論や時間論の著書のほとんどはこれ以上のライブニッツ的推理の内幕を探ろうとはしてこなかつた。おそらく資料が揃っていないのだから。私はこの時間、空間の定義がS・クラークとの夥しい往復書簡で語られていることをエル・シュテイマンの「時間と空間の物理学」でふんだんの引用とともにやや詳しく知らされて興奮した覚えのあるとはいへ、さてそこから何を引っぱり出したものか、シュテイマン教授以上の何を思いつけない。そこで仕方なく、思慕のさまようままでも落ち着かないので、「単子論」を読み込み、自分なりに自由に書き替えた「モナドロジー・ダイジェスト」を「原ライブニッツ」と私の間の「仮りのライブニッツ」に仕立て、これを踊り場としている現状である。

しかし、敢えてわがライブニッツはかくの如きであらうと結像させた図面によれば、そこに「魂理学」と「聖理学」の統一構想を読むことができるようにおもわれる。この耳馴れぬ二つの学の名前は私の好んで使う名称で、「魂理学」は中村宏が最初に言い出したもの、「聖理学」は私の勝手に名付けた或る革命的範疇のことである。説明は不要、読んで字の如し。実はこれにさらに「自然学」あるいは「物理学」を加えた三位一体を、エビクロスの「倫理学・規準学・自然学」にならつた「新・学問論」としようとはまず冗談のように考へているのだが、どうやらライブニッツ全思想もこの分類で眺望するのが私には有効であると着想しはじめた天先だ。一応この暴力的区分では、「単子論」が魂理学に、「形而上学叙説」が聖理学に、ほぼ重なりあうことになる。冒頭のワグナーへの手紙の文面などは両者の統合的視点から綴られている例だつた。当然、自然学も加わるべきなのであるが、こちらはとも引き寄せられそうもない。そこで、魂理学のライブニッツ的依拠の方法、といった誰の役に立ちそうもないわが推測の内容を少々述べておくことにする。

真ツ先にひとつの推論を出すと、ライブニッツ魂理学の中枢概念「単子」は物質の究極単位でないのはむろんのこと、精神単位でもなく、「神」魂——「論理」であるような世界要素である、と考へたい。ライブニッツ自身が各処で綴っている表現に従えば、このようにはならず、とりわけ神はモナドのつくり手ではあつても、モナドが神の要素であるなどとは言明されていない。つねに「創造されたモナド」と綴られていることからみて、神がいつさの超越者となつてはいるのはこの時代までのあらゆる思想家と交らぬところである。しかし、それならばなぜに「弁神論」を書かなければならぬか。「神は一つしかない、この神だけで十分である。」(単子論)とか「神だけがわれわれの外にある表象の直接的対象であり、われわれは神を通してすべてを知覚する。」(形而上学叙説)と書かなければならぬだろうか？ ライブニッツの時代、「神の名」において語られた多くの真理が真理ではなくなつてきたという判断がライブ

- 無神論者に反対する自然の告白」「自然学の新版説」
- 「形而上学叙説」「国際公法叢典」
- 「最近の中国事情」「弁神論」
- 「理性に基づく自然と思想の原理」「単子論」
- 「数学的なものの形而上学的起源」